ほしのきえたうみ

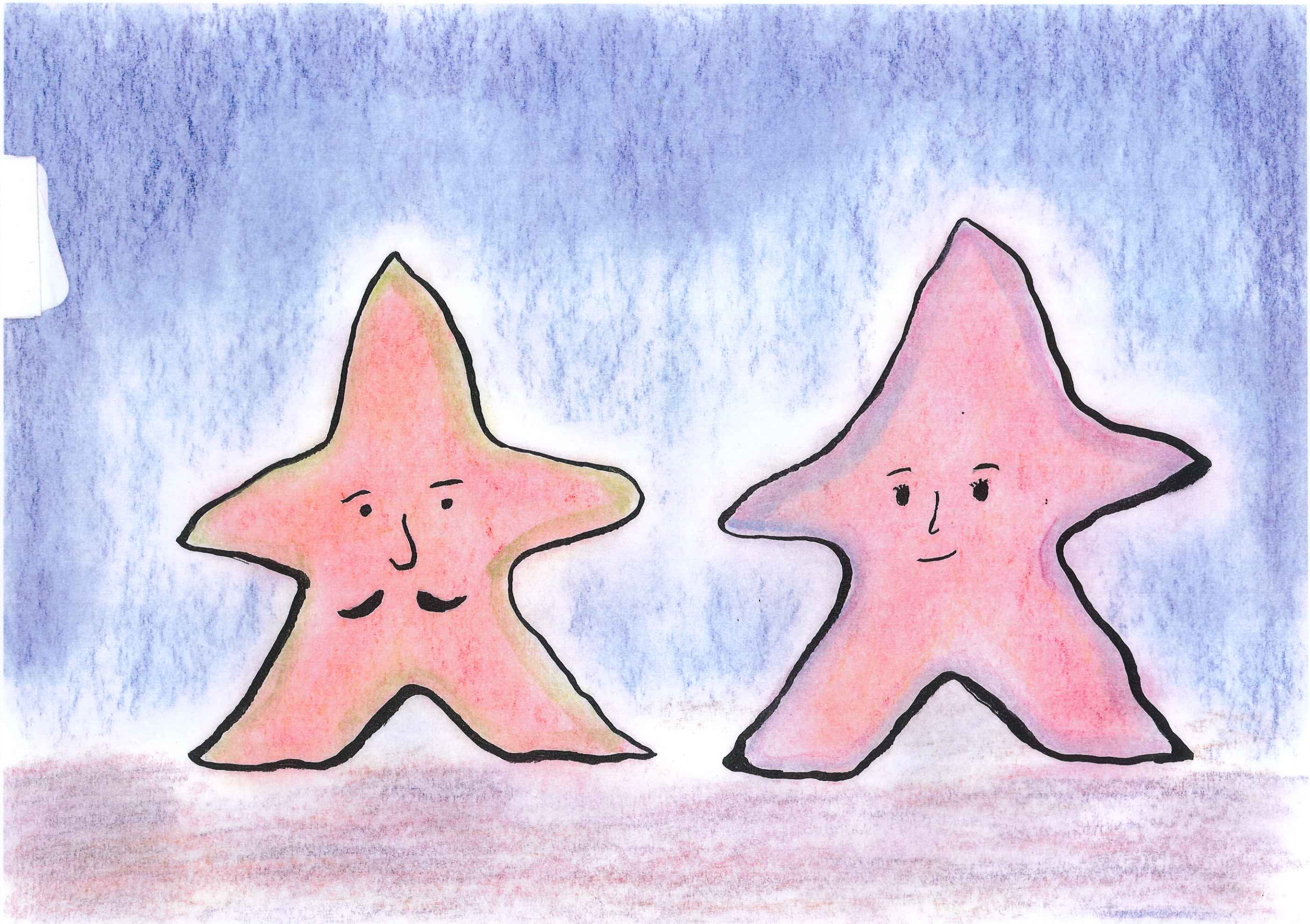
作と絵　大谷祐人

■1

深い、深い、海の底で、
ヒトデの夫婦が暮らしていました。

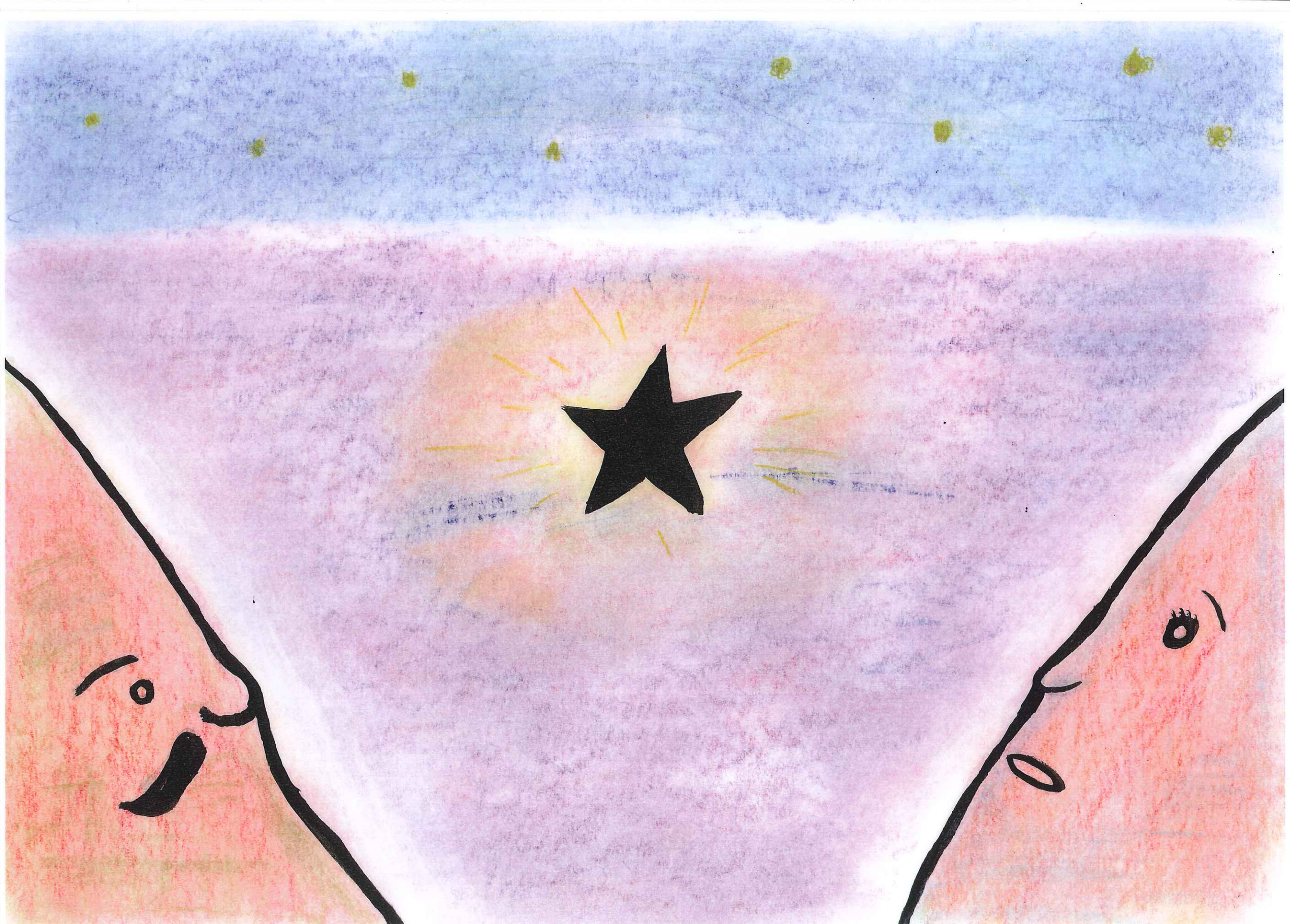
ヒトデの夫婦は、海のおきてを守り、つつましく暮らしていました。

ヒトデの夫婦には、子どもがいませんでした。
自分たちの子どもがほしいと願っていました。



■2

ある日のことです。
ヒトデの夫婦は、キラキラ光るものが、
海の底へ落ちてくるのを見つけました。
近づいてみてみると、それは…(めくる)

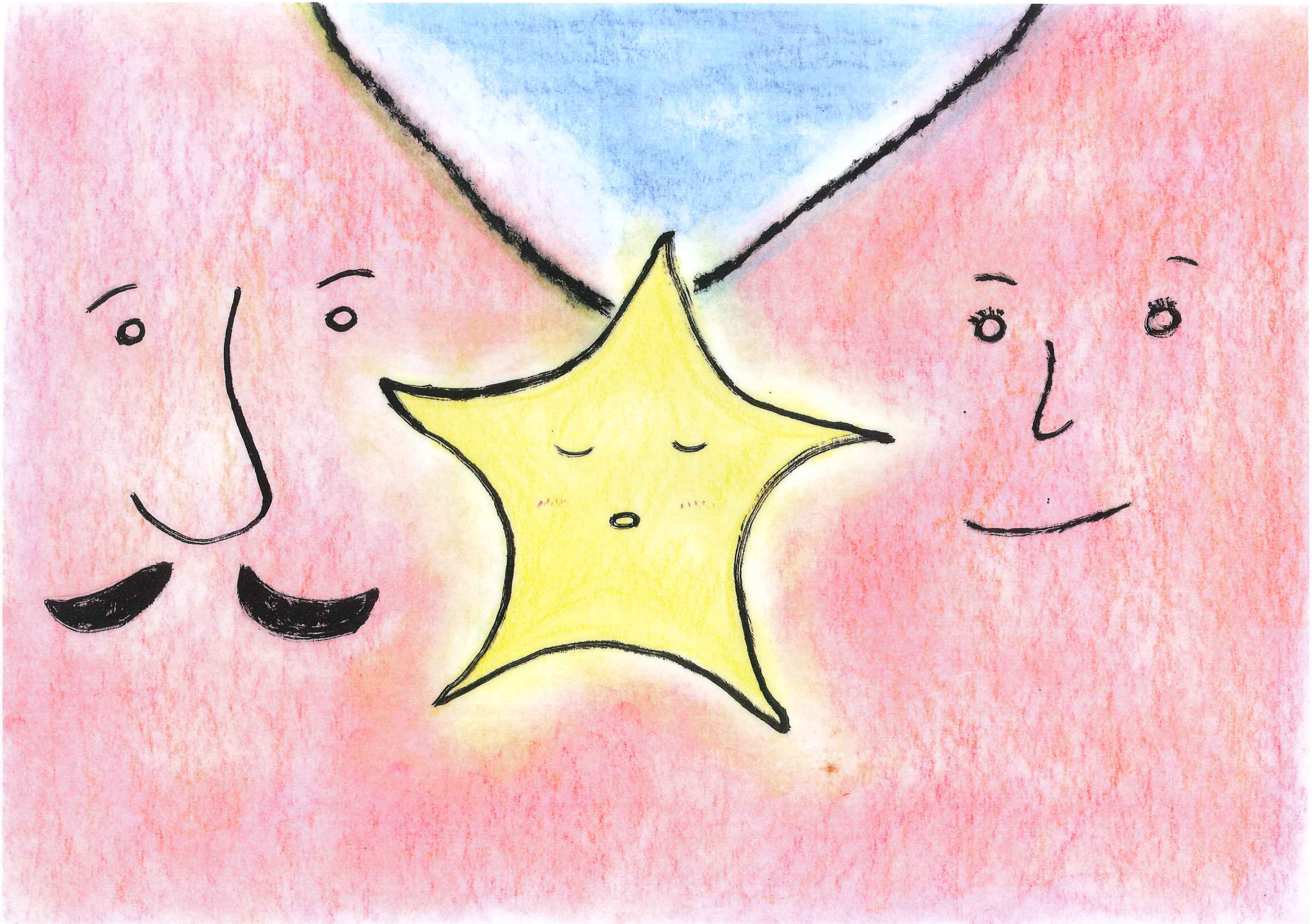


■3

お星さまの赤ちゃんでした。
かわいい、かわいい、赤ちゃんです。

ヒトデの夫婦はその赤ちゃんを、育てたいと思いました。
けれども、それは、海のおきてを破ることでした。

ヒトデの夫婦は悩みましたが、
星の赤ちゃんを、自分たちの子どもとして育てることに決めました。



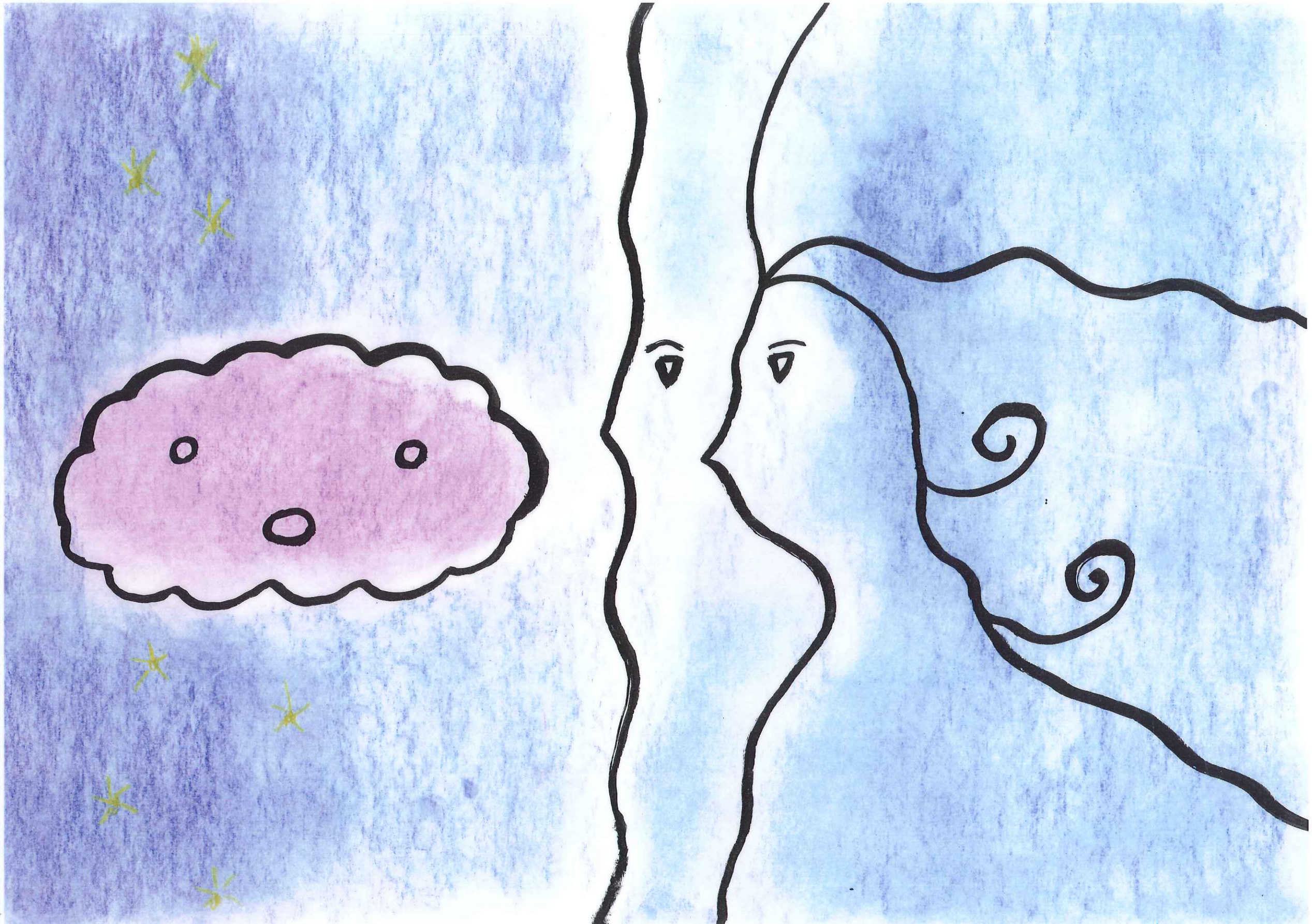
■4

その頃、夜空の雲は、迷子になった星の赤ちゃんを探していました。
そして、海に言いました。

「海さん、海さん。キラキラ光る流れ星の赤ちゃんが、海に迷い込んでいませんか」

海は、海の生き物たちに伝えました。
「キラキラ光る星の赤ちゃんを見つけたら、すぐに私に言いなさい。」

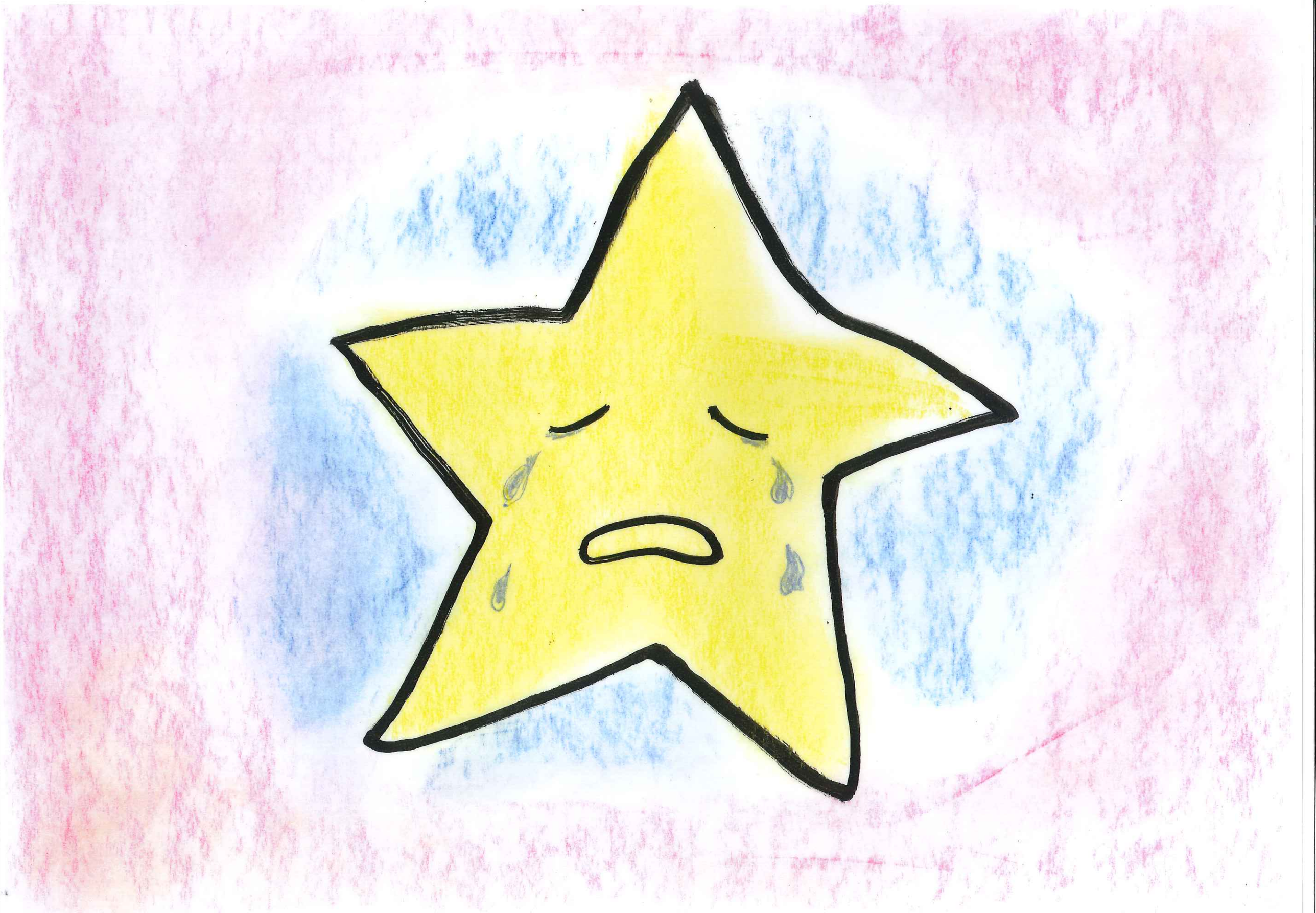
しかし、星の赤ちゃんは見つかりませんでした。
ヒトデの夫婦は、海にだまっていたのです。



■5

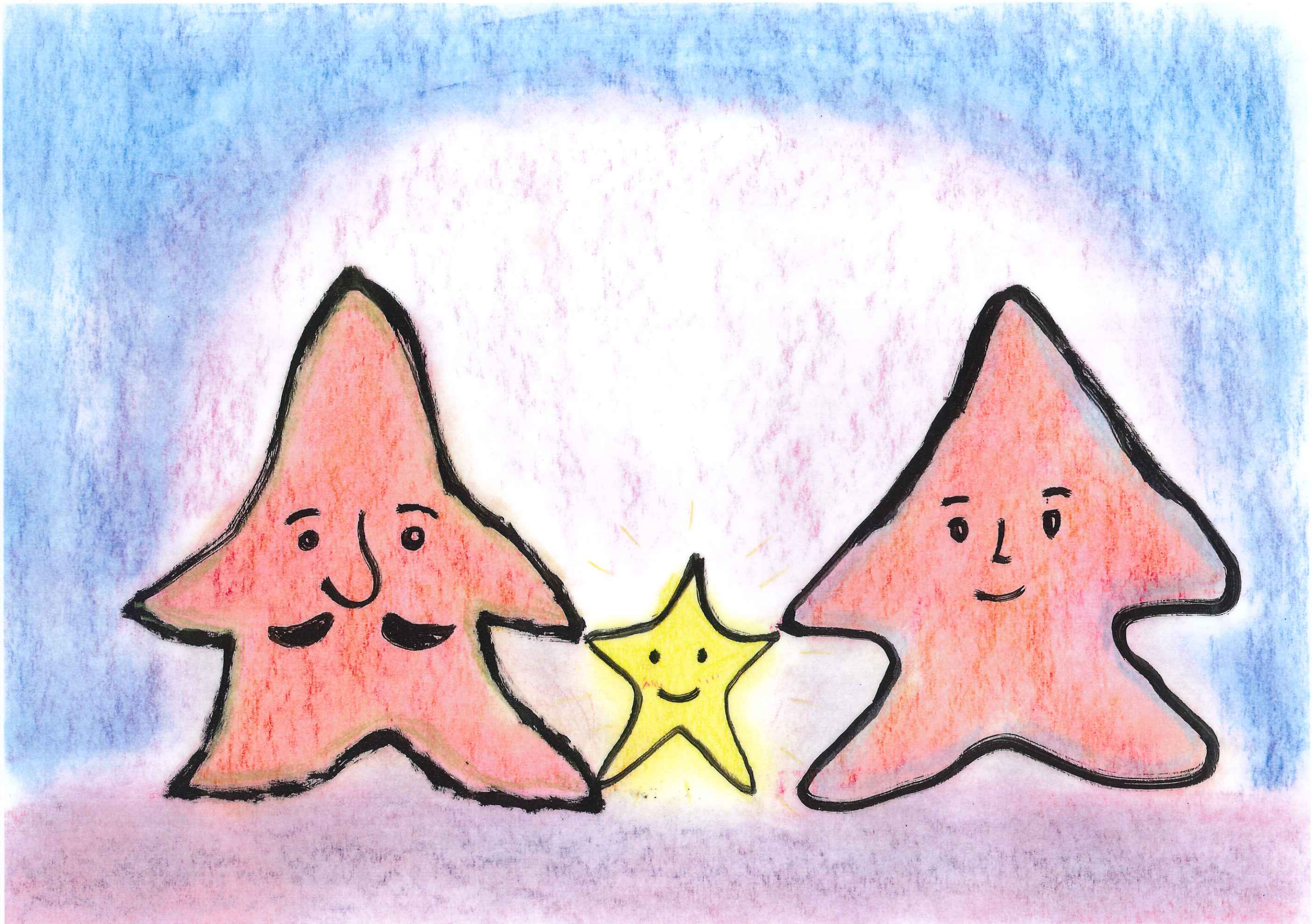
星の赤ちゃんはよく泣きました。
涙が止まらないとき、ヒトデの夫婦は、歌を歌ってあげました。

なみだをとめて　ねがいぼし
かわいいえがお　うかばせて
うみはながれ　つつみこむ
しあわせなひび　いつまでも



■6

すると、星の赤ちゃんは泣きやみ、微笑むのでした。
ヒトデの夫婦は、星の赤ちゃんを、とても大切に思っていました。

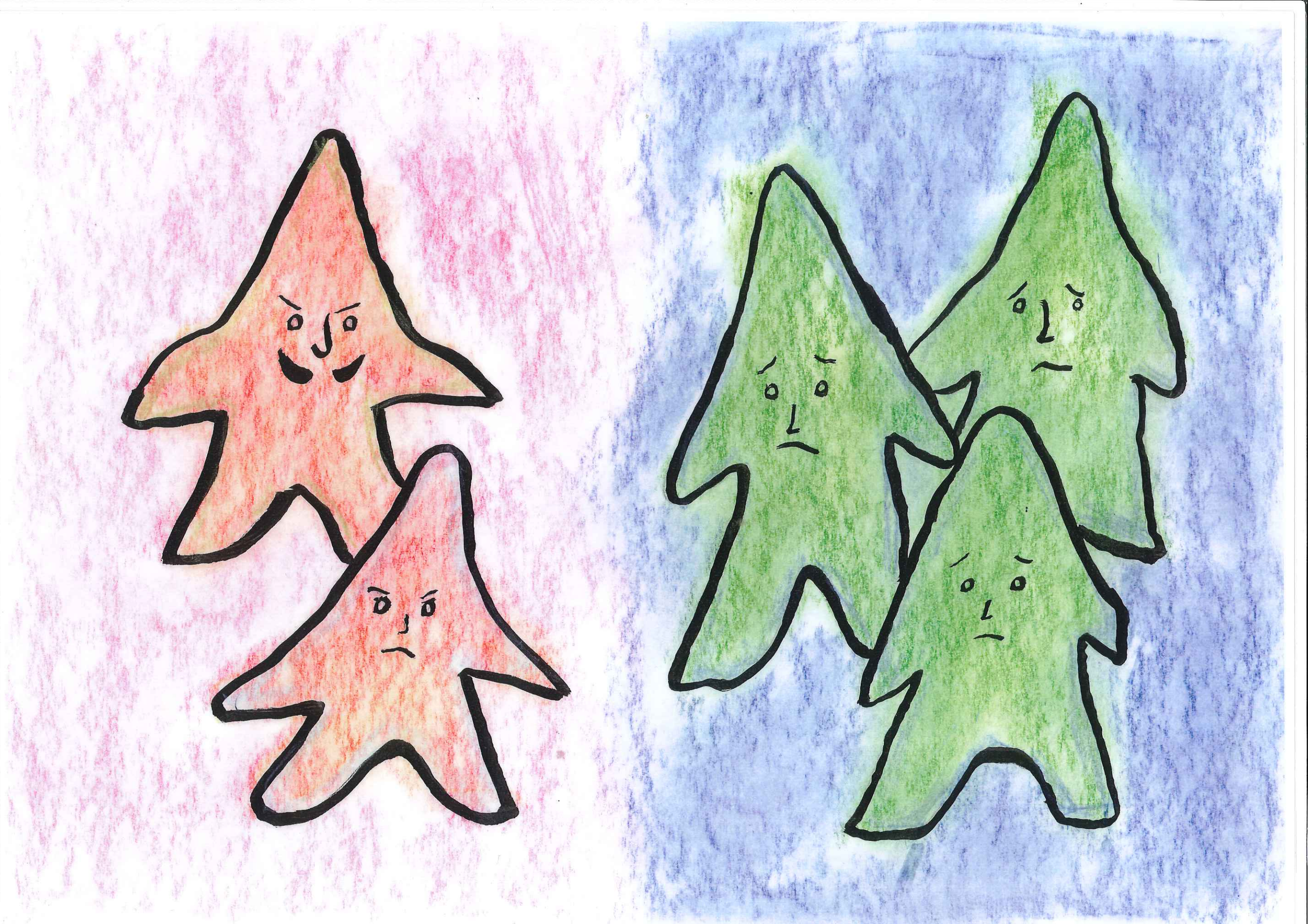


■7

やがて、星の赤ちゃんは、きれいな女の子になりました。
たくさんのヒトデの子どもたちが、
星の女の子と友達になりたいと思いました。

■8

しかし、ヒトデの夫婦は、ヒトデたちと星の女の子を仲良くさせませんでした。
女の子がお星さまであるとわかってしまったら、大変だからです。



■9

星の女の子は友達がほしかったので、さみしくて涙を流しました。

ある夜、星の女の子は夢を見ました。
夢の中で、お星さまたちに、こういわれました。

「きみはヒトデの子どもではないんだ。
お星さまの子どもなんだよ。」

星の女の子は、とても驚きました。

「なんということでしょう。
私は夜空から来たのね。
夜空のもとに、帰らなくては。」

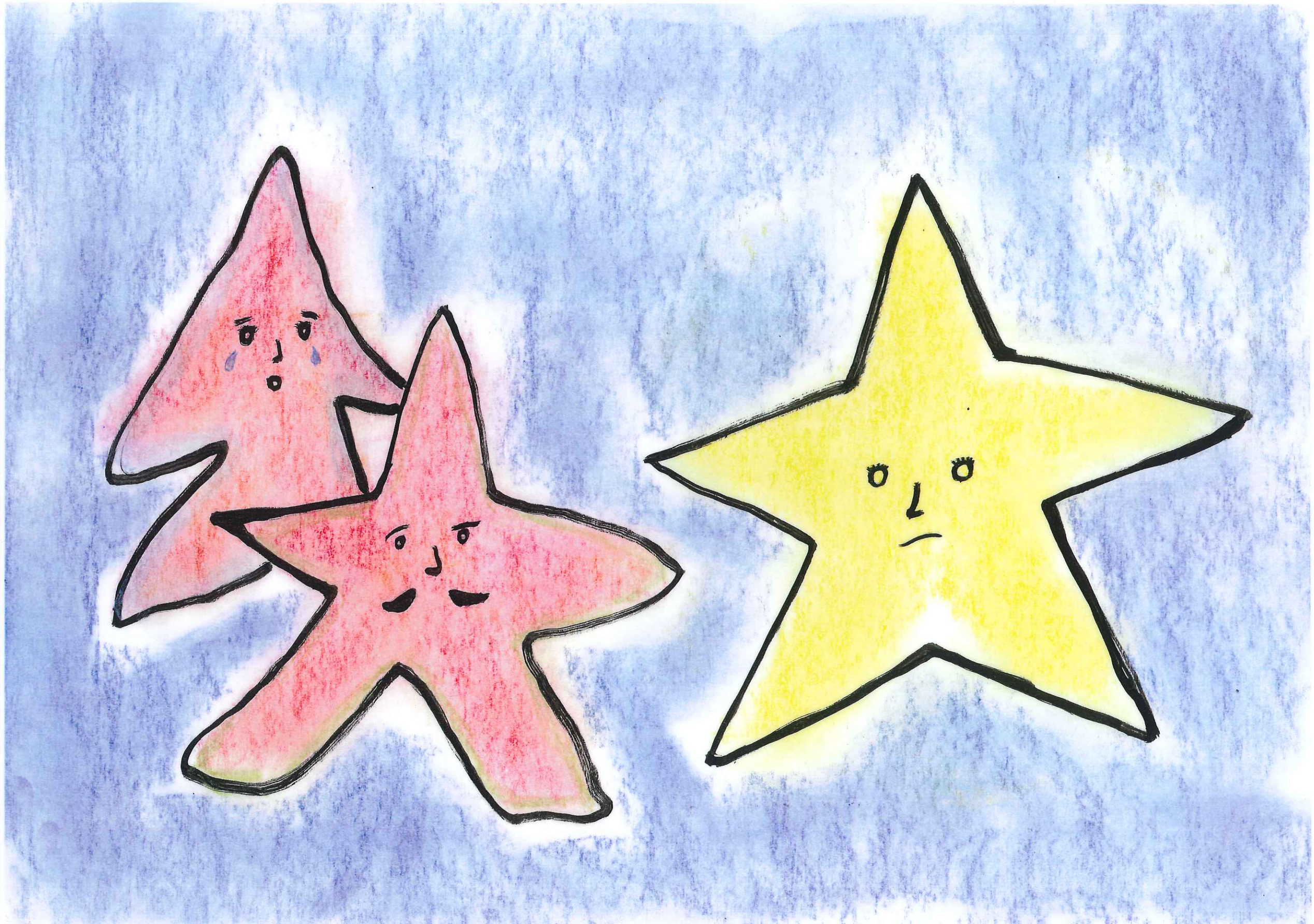
■10

あくる朝、星の女の子は、ヒトデの夫婦に言いました。

「私はお星さまの子どもなんですね。
夜空のもとに帰ります。」

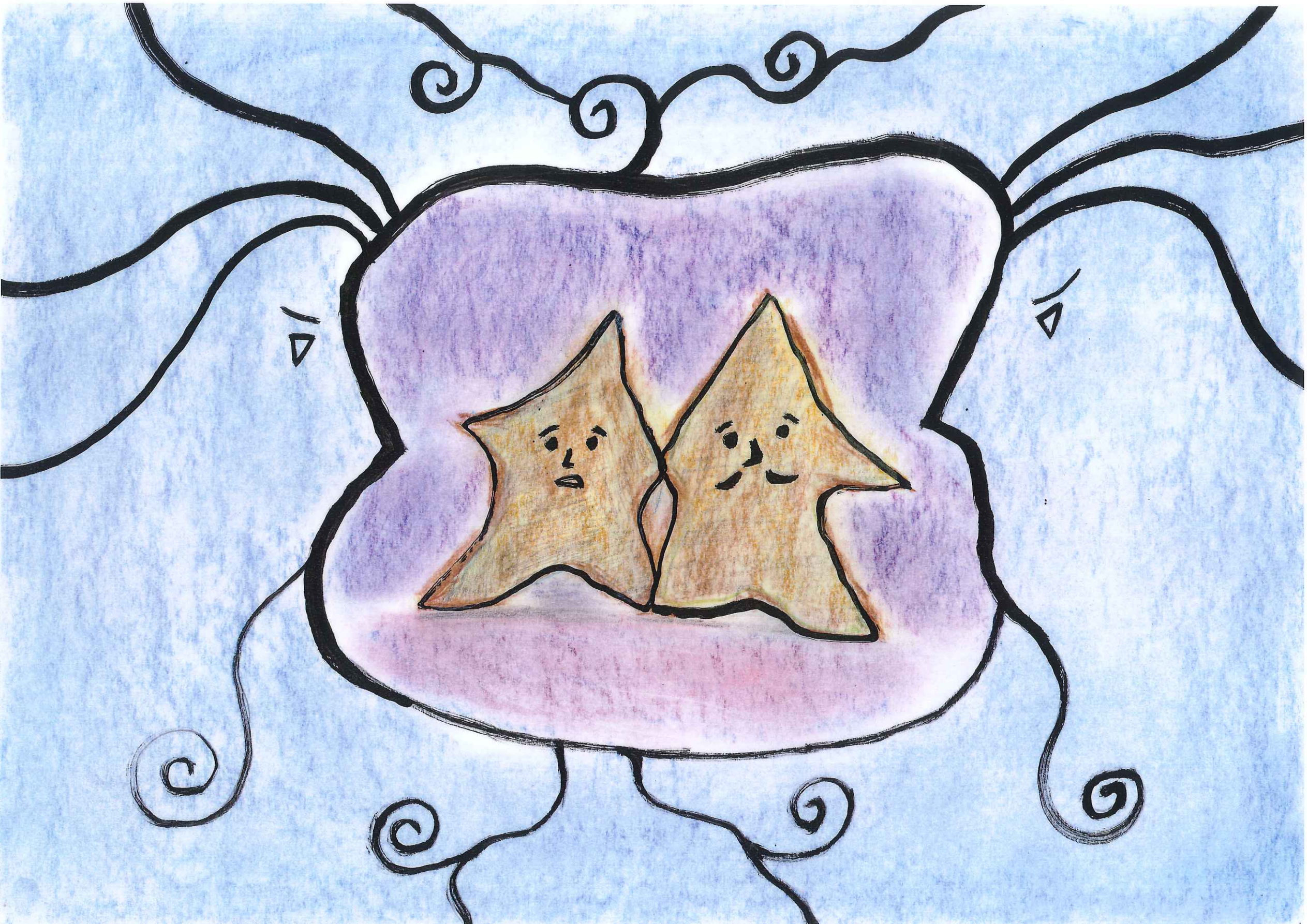
夫婦はそれを聞いて、驚きました。
そして、止めようとしました。

大切に育ててきた星の女の子と、
離れ離れになりたくなかったのです。



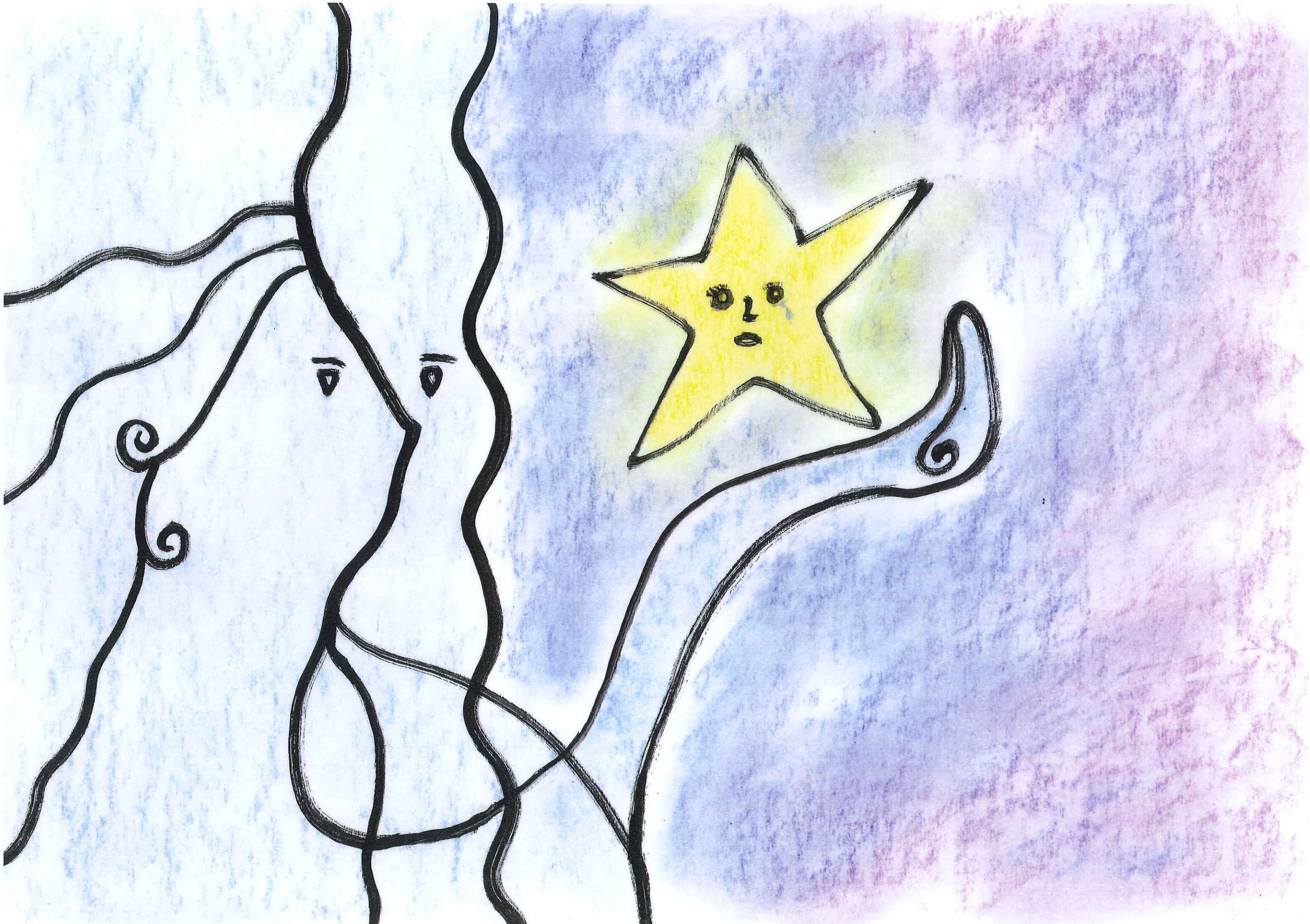
■11

しかし、海はすべてを聞いていました。
海は怒って、ヒトデの夫婦を石に変えてしまいました。



■12

それを見た星の女の子は、涙を流し、海に言いました。
「海さん、どう許してください。
私はヒトデではないけれど、
ふたりは私を大切に育ててくれたお父さんとお母さんなのです。」



■13

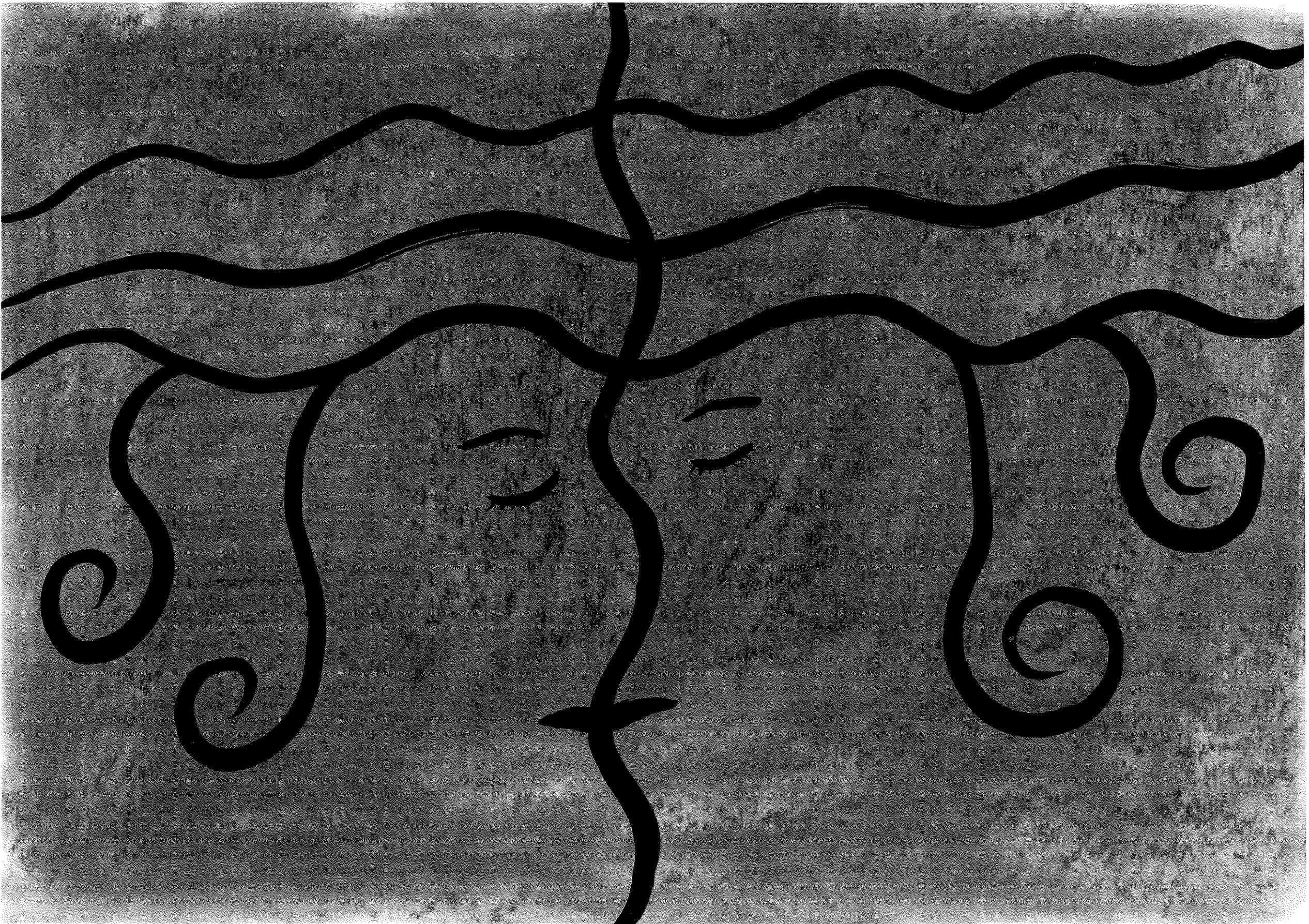
海は答えて言いました。

「星の光が海の底まで照らすとき、ふたりはもとにもどれます。
輝くきれいな星になりなさい。」

星の女の子は、うなずきました。
そして、雲に乗って、夜空に帰っていきました。

■14

それから、海の底は、深い闇に包まれていきました。
深い、深い、海の底の、
深い、深い、闇でした。



■15

今夜、空には、星が浮かんでいます。
幸せに、光り輝いています。
海の底まで照らすほど、キラキラ、キラキラ輝いていました。

■16

そして、夜空に浮かぶ星を、
いつまでも、いつまでも眺めているヒトデの夫婦がいます。
ふたりは今、本当の幸せを知りました。

それは、お星さまの歌を聴くことでした。

「ひかるほしぞら　うみてらす
こぼしたなみだ　おもいでに
ときがながれ　わかれても
しあわせねがう　いつまでも」

ほしのきえたうみ

作・絵　大谷　祐人

二〇一二年　十一月　四日

桐竹座　文化教育奨励プロジェクトより
聖母愛児園に寄贈